

日・中社会の行動原理と行動様式：比較分析 (1)

—「場における自己の認知」VS.「二者間の情(qīng)への執着」—

岩田奇志

I 序論

ひとは普通一定の社会文化環境のなかで生まれ育ち、その社会で生きるのに必要な行動様式を無意識に身に付けていく。このため、ひとは、行動の背後にあるみずからの文化に気づかないままに、これを当然のこととして、日々の行動を行っている場合が多い。つまり、異文化に触発されるなどして自分が育てられた文化についての「意識的反省」と関心を持つに至った人びとの場合を除けば、彼らは、多くの場合なぜ自分がそのように感じそのように行動するのかを意識していないことが多く、もちろん自分を育てた文化についての概念的な説明も困難である。

しかし、異文化と出会うとき、ひとはある種の戸惑いを感じ、その行動形態に驚きを覚える。そしてしばしばそのことが契機となって、人は自分の背負う文化に興味を持ち、なかには単なる暗黙知のレベルを超えて、意識的にいわば形式知としての理解を求めようになる。

このように文化は異なった文化を鏡にすることによって、みずからの特徴を浮かびあがらせることが多い。これまでの日本文化論または日本人論の多くは、欧米文化との比較のうえに築かれた成果であった。これに対して、本稿は、同じアジアの国中国と日本とを対比し、それぞれの国民の行動における行動原理（行動の基本軸）、それに基づく行動様式の特徴を明らかにすることによって、両文化の特徴を浮き彫りにすることを意図するものである。

ここで文化を扱う時避けることのできないいくつかの重要な問題について、筆者自身の考えを予め明確にしておくことが重要である。

1) 本稿における分析対象としての文化：文化の定義

先ず「文化」の定義であるが、ここでは、文化を「一定範囲の人びとの行動の大枠（傾向）を形成する価値およびそれに由来する行動様式」と定義しておこう。同じ社会文化環境のなかで暮らしている人びとも、個々にはそれぞれ異なった価値観と行動様式とをもっている。これは一人一人のもつ個性であるが、これらの個人的な行動のなかに、その多様性を貫いて、一定の幅をもちながらも明確な傾向性が見られる。こうした一定の範囲の人びとの行動に表れる型、その根底にある価値やものの感じ方が、本稿において筆者が究明しようとしている「文化」である。このような「文化」は時代とともにその表現形態を変化させつつあるが、その本質的な部分や型は変化しにくいと筆者は考えている。

2) 文化の共通性と差異性：比較文化論の立場

もう一つの問題は、比較文化論の研究において、比較対象に取り上げた複数の文化の共通性と差異性の問題である。日本の文化と中国の文化はともに「文化」という上位の抽象次元においては共通性を持つことになる。冒頭に述べた「文化」というものの持つ性格は、このレベルにおける「共通性」

であるといっただけよい。しかし、比較文化の研究は、こうした文化にみられる多様性を扱うことだと考えている。つまり、比較文化研究とは、「文化」としての共通性を究明しようとするものではなく、これを認める立場に立ちつつ、それぞれの文化の特徴、その相違を明らかにしようとする研究である。

3) 道徳的評価の回避

第3の問題は、個別の文化に対する道徳的評価の問題である。文化は、一定の社会で暮らしている人びとの間に、その社会での共同生活を営むために形成された価値体系である。比較文化論においては、ある価値体系にたいして異なる社会の価値体系を基準として一方的に道徳的評価を加えるのは慎まなければならない。各文化は、それぞれの社会を維持するように機能するという一面を有する。それと同時に文化は、その機能的ではない面をも合わせ持っている。つまり、それぞれの文化は他の文化の持っていない強みを持つと同時に、またその同じ傾向がもたらす弱みを持っていると考えるべきであろう。また、各社会の文化は、それぞれの歴史の中で、時代により様々な表現形態をとりながら徐々に発展してゆくが、そうした変化の中に、きわめて特徴的な傾向が維持され、時に磨かれてゆくと筆者は考えている。これは先に述べた文化というものの持つ共通の性格である。

以上のような認識に立って、現実には日本人と中国人の間に起こった出来事の意味を検討することを媒介として、日中両国民のそれぞれの行動様式の特徴を抽出し、その根底にある価値ないし原理を明らかにし、日中文化を解明するひとつの分析枠組みを構築するのが本稿の目的である¹⁾。

4) 分析の学術性について

最後に、一つの学術論文を志向する本稿で筆者が採用した方法について一言お断りしておく必要がある。筆者が採用した方法が、オーソドックスな方法論から見るとかなりヘテロドックスな方法であると思われるかもしれないからである。すなわち、本稿では、問題の各側面をできるだけ生き生きと把握するために、まずいくつかの事例（文化の諸側面を顕著に表していると考えられる諸事例）について検討し、そうした事例が背後に包み持つ意味、そうした意味が指し示す価値観をえくり出すという方法を採用している。「文化」というのは、ある範囲の人びと、たとえば日本の社会で育ちその主要な部分は日本の社会に定住している人びとが、本人も明確には意識していないほど心に深く抱懐しており、彼らの行動のなかにみずからを顕す型、こうした型の根底にみられる価値観を意味しており、統計的手法などには馴染みにくいきわめて把握の難しい「行動の型」や「行動原理」であり、それらを「意味理解」などによって抽出することが重要であると考えられるからである。本稿で取り上げた事例は、一方の文化に育った人びとにとって違和感を抱かせるような事例、「なぜ？」という関心を強く抱かせるような事例を選び、その根底にある意味を分析する形で進められる。

提示した事例は、日本人と中国人の行動原理や行動様式について、筆者が在日20年にわたって行ってきた観察をもとにして、意味のある分析枠組みに集約する契機となった諸事例のうちから、特にわかりやすい説明を行うのに役立つと考えられる事例を選んだものである。ここでご注意いただきたいことは、筆者が事例の分析からのみ結論を引き出しているのではないということである²⁾。

ここで、研究の学術性についての筆者の考えを簡単に述べておきたい。研究の「学術性」を規定する要素にはいくつかのレベルがあると思われる。

- ①まず、研究のテーマが、学術的関心 (academic interests) に答えるものであるか否か。
- ②説得的な自説展開があり、論理的に破綻していないこと。意味のある一般化が行われていること。
- ③学術研究にふさわしい手法と表現形態をとっていることである。

本稿はまずそのテーマとして、日中両社会における基本的な行動原理をつかみだし、これを分析枠組みとして、日中両社会の構造や日本人・中国人の行動パターンを的確に分析しうる枠組みとして提起することを意図して、学術的関心に応えるものであると考えている。

第2に、本稿は、この分析枠組みに基づき、これに続く数編の論文によって、両社会で顕著に表れる行動形態とその意味、その結果もたらされる社会構造、その上に築かれる社会・経済・組織（経営）・政治形態・外交行動などについて分析することを意図するものである。したがって、全体としての自説の詳しい展開は、これらの続編にゆだねられる。また、本稿で提起した分析枠組みの有効性（すなわち筆者が意味のある一般化に成功している否か）の検証は、こうした分析にゆだねられている。しかし、この分析枠組み自体は、続編で詳しく検討するように、従来の分析枠組みとは異なっており、分析枠組みの抽出自体も、自説として展開していることに、ご留意いただきたい。

第3に、論証の方法としては、事例の分析に大きく依存しており、学問観の如何によっては、これに疑念を持たれる可能性もあると考えられる。しかし、筆者の分析対象である「文化」が、両国民の深層心理と深く関わっており、人目には映りにくい形で人々の行動のなかに表われてくるために、これを経済学の指標などのように、明確で信頼できるデータとして提示することは困難である。この点精神分析学の先駆者たちが様々に批判を受けながらも、その成果は、その後精神分析学として発展し、さらには精神医学にも計り知れない影響を与えてきていることを思えば、こうした手法も比較文化論における一つの実験として、許容されるのではないかと考えている。文化の問題は、人間の「心」と深く関わっているために、その論証の方法は、社会科学のそれよりは、むしろ文学のそれにより近いものとなろう。研究対象によって学問観が異なってくるのはやむをえないことであり、しばしばそれは必要なことであると、今筆者は考えている。数量的な分析は、もしこれを行うとしても、こうした作業及びその説明力の検証の後にくるべきものであり、こうした分析なしには数量的な分析自体困難であると筆者は考えている。なお、ここで提出した分析枠組みの有効性の論証は、続編における日中社会の行動原理および行動様式の詳しい分析のなかで果たしたいと考えている。本稿での作業は、そうした仮説の提唱であるとお考えいただきたい。

II 「場における自己の認知」 vs. 「二者間の情への執着」

筆者は、在日20年の体験および観察から、日中社会の行動原理とそこから現れてくる行動様式の違いを生み出す根源的理由を、日本人に顕著に見られる傾向、すなわち「場における自己の認知」およびこうした自己としての主体的行動、中国人に顕著に見られる傾向、すなわち「二者間の情への執着」とに求める。これを裏返して考えると、日本人の情が「職場などを中心に広く拡散した、場を居心地よくしようとする、いわば潤滑油のような情」であり、これが、ごく限られた関係のなかで肉親のように濃密な「親情」を求める中国人に「きわめて冷たい関係」と感じさせ、また逆に「場」における自分の位置（立場）を考へることなく、自分の思いで行動する中国人の行動に対して、「場所柄をわきまえない粗野な行動」と日本人に感じさせる⁽⁴⁾。本稿においては、「情」を中国語的な情(qīng)の意味で使用する。

こうした行動原理の違いが、両者の行動の違いと大きく関わっており、不幸にして、このことが両者の間の理解を妨げ、時に深刻な誤解を生み出していると筆者は考えている。本稿では、以下、こうした行動原理の違いを、具体的な事例を活用しつつ分析する。

1 基本的な座標軸としての「場」と「情」

〈事例1〉

筆者は、ある学会で、同じ中国出身の教員 A さんから好意あふれる次のような言葉をいただいた。いわく、「あなたに会って私ははじめて真の学者に出会った気がする」。この言葉は、筆者にとっては、くすぐったいほどの過分なほめ言葉であり、相手の好意が強く感じられるありがたい言葉だが、筆者はそのとき大きなとまどいを感じていた。その理由は、この時、この領域の碩学で、「真の学者」というのもっともふさわしい学究のひとりである長老教授 B 先生がこの場所におられたからである。しかし、興味深いのは、この発言が、日本文化と中国文化との違いを鮮明に表していると思われることである。

この場合、A さんは、同じ中国出身の筆者に特別の好意をもってくださり、それを示そうとしていたものと思われる。そして、もしこれが中国であったならば、特に違和感を感じずような類の話ではないし、また、しばしば起こりそうな事態である。中国的なコミュニケーションは、基本的に話し手と聞き手との二者間で行われるものであり、周囲にいる人びとはこれとは無関係な存在として意識の外に押し出されているからである。コミュニケーションの内容はその話者同士の二者間の個人的な関係・感情によるものであり、全く他の人に対する関わりを含んではおらず、そばで聞いている人びとを傷つける意図は全くない。こうしたコミュニケーションの構造のために、中国人は周囲の状況を顧慮することなく、きわめて率直にものを言うことができるし、まさにこれこそが親しい友人の間での「親情の発露」として相互の関係を強化する作用を持っている。

これに対して、日本人の感性にあっては、A さんは、その場の全体状況とそこにいる自己の位置を認識したうえで発言すべきであり、傍らに研究業績の豊かな B 教授がおられること、筆者は研究期間も短く、筆者の研究業績は B 教授のそれには遠く及ばないことを認識すべきであり、このような認識にたつならば、先のような発言は、あり得ないことを自覚しなければならない。事実このような事態は、日本的に「場」を強く意識する状態のもとでは、起こりえない事態であると言わなければならない。そして、このように自覚するならば、先の発言は、せいぜいのところ「あなたも研究では頑張っているわね」程度の表現とならざるを得ない。

この事例が示唆する問題は、日本の文化にあっては、人は自分が置かれている「場」の中での自分の位置を認識し、そうした位置にふさわしい発言や行動を行うよう努めているのに対して、中国の文化にあっては、相対している二者の感情がもっとも重要であり、周囲の人たちの存在は、普通意識から追い出されているということである⁽⁴⁾。

そしてさらに中国の文化にあっては、対話者は、周囲の状況に煩わされることなく、二人の真の感情に基づいて率直に発言しあう。つまり本音で語り合うことが、「親情」に結ばれた関係を維持するためにきわめて重要な意味を持っているということである。中国人の場合、日本人の多くがしているように、「場」の状況の中で、自分の立場を意識した控えめな発言を続けていると、水くさい行為として両者の関係に水を差し、次第に関係が疎遠なものとなりかねない。逆に親しい中国人の場合、率直で辛口の忠告やコメントは、友情の現れとして受け取られる傾向が強い。「場所柄もわきまえぬ」（日本の感覚）率直で「大仰な」真情の表現は、このような文化的特徴を反映している。

ここに日本文化と中国文化を隔てる基本的な座標軸の違い（重要な違いの一つ）が見られるようである。筆者は、こうした違い、すなわち、「場における自己の認知」と「二者間の情への執着」を、

ひとつの分析軸として採用したいと考えている。以下、さらにいくつかの事例を分析することで、この考え方を補強したいと考えているが、その前に、「場」および「場の意識」についての筆者の立場を明らかにしておく必要がある。

2 「場」および「場における自己の認知」：日本の文化

1) 「場」の意味：「枠組みとしての場」と「状況としての場」

日本人が「場」を重視するという指摘は、しばしばなされてきている。その詳細な分析については、本稿に続く別の稿に譲るが、このように慣用されてきた「場」の概念と、筆者のいう「場の意識」の概念との微妙なズレについて一言しておかなければならない。

従来、「場」という言葉で表現されてきたものは、職場とか会社、部局、あるいは大学、学部など、明確な「枠」を持ち、その構成員たちの頻繁な接触に基づいて意識される、いわばシステムの限定された範囲を意味することが多かった。「場」の多重構造などという場合の「場」は、このような側面を指している。

しかし、このようなはっきりした枠を持たない場合にも「場」は当然に成立する。たとえば様々な組織や部局の代表が集まって会合やパーティーが開かれた場合、先に見たような固定した「場」の外にも、柔軟かつ流動的な「場」が成立する。筆者は、こうしたより広い意味での「場」をもふくめて検討を進めたいと考えている。そこで、今ひとつの概念として、「何らかの形で範囲を限定された条件の下で意識される全体状況」と規定される概念の導入が必要となる。この限定された範囲というのは、〈事例1〉で言えば、Aさん、筆者、B教授のほか、その場の対話が耳に入る範囲の人びと、さらにこうした対話が誰かの口を通して伝わる可能性のある人びとの範囲を漠然と意識した場合と考えることができよう。この場合、物理的にその場に居合わせなくても、情報が伝わる可能性があると判断される人びと（その範囲はかなり漠然としている）も、「場」の構成要素と考えられる。

この両者は、深く関連しつつも、その意味は大きく異なっている。そこで筆者は、本稿では、前者を「枠組みとしての場」と呼び、後者を「状況としての場」と呼んで区別することとする。「枠組みとしての場」は、「状況としての場」が常時発生し、このために日頃人びとの意識にのぼる類の「場」であり、「状況としての場」は、人びとがときに応じて意識した場合の「場」と言い換えてもよい。

2) 「場の意識」：「場」における自己の認知

「場の意識」というのは、このようなある限定された範囲のうちであって、その全体状況を意識しつつ行動することを指すが、ここでもう一つの問題を明確にしておく必要がある。すなわち、日本人が「場」を認識しつつ行動する傾向が強いという場合の、一つのきわめて重要な論点である。

いかなる社会でも、人びとが目標を達成すべく行動する場合には、自己の認識の及ぶ範囲で、全体状況を意識しつつ行動することには変わりはない。ブラジルの強豪サッカーチームのメンバーそれぞれは、試合において当然「競技場」の全体状況を意識しながら行動している。したがってさきの規定だけでは、日本人の行動に表れる行動上の顕著な特徴は浮かび上がってこない。筆者の見るところ、日本人の「場」の認識の特徴というのは、「場」の全体状況の中での自分の「位置」を鋭く意識し、そうした「場」の中の自分の立場から自己の振る舞い方を決める傾向が強いところに認められる。濱口恵俊の興味深い指摘を援用するならば、他の多くの社会では、全体状況を認識する場合に、濱口が

うところの「インサイド・アウト」型の認知態様（自己の中に判断の座標軸を持ち、かつ全体状況を認知しながら行動する）のもとで行動するのに対して、日本人の場合には、全体状況に対する濱口がいうところの「アウトサイド・イン型」の認知態様（外部に視点を置いて自己の振る舞い方を決定する一筆者注）によって「場」における自己を認識し、（この「場における自己の認知」という点は濱口の見解ではなく、筆者自身の見解である）こうした自己の視点から振る舞い方を決定すると特徴づけることができると思われる¹⁵⁾。

日本人が「アウトサイド・イン」型の認知態様に基づいてその振る舞い方を決定するという表現は、外部状況が一方向的に人の振る舞い方を決定するという誤解に導きかねない。しかし現実とは違って、全体状況に対して「アウトサイド・イン」型の認知によってまず「場」における自己の位置づけを行い、こうした自己の認識のもとに主体的な行動を行うものと理解することが、より現実に近いと筆者は考えている。それは、環境適応の視点から見ると、より高次の主体性であるということができよう。

3 「場」を意識した控えめな表現、控えめな行動

「場における自己の認知」とそうした自己の立場からの「主体的行動」が、日本社会における行動原理であるとする、そこから、ある特徴的な行動様式が導かれる。次にこうした「場の意識」がもたらすひとつの重要な行動様式として、「控えめな表現、控えめな行動」をあげることができる。「枠組みとしての場」の安定性や融和が求められるだけでなく、「状況としての場」においても、「状況によってその振る舞い方を見つめられている自己」を強く意識する（「アウトサイド・イン」型の認知態様）からである。日本文化が尊重する「和」は、多様な側面を持ち歴史的にもその意味が変遷してきているが、それはこの「場」の安定性維持と重要な関わりを持っていると筆者は考えている。

さて、「場」の状況の中での自己を強く意識し、「場」の安定性と融和を維持しようとするならば、その表現や行動は、いきおい控えめなものとならざるを得ない。

日本の社会では、遠回しの表現や曖昧な表現、ちょっとした仕草でコミュニケーションをはかることが多い。このことは「場の状況、場における自分の位置」を強く意識する文化的特性と無関係ではないように思われる。同様に、日本人は他人の行動・姿を見て自分の振る舞い方を反省する傾向を持っており、時によそよそしい態度に出会った時には、自分に何かいけないことがあるのではないかと反省する傾向が強く認められる。これらも「場の意識」と深く関わっていると思われる。このために、日本人が人に注意する場合、ごく穏和な表現がとられる。

この問題とのかかわりで、最近気づいた一例を挙げよう。日本の組織でも、締め切りまでに必要書類を提出しない人がいるように感じられる。ときどき文書督促のメールが事務局から発せられているからである。興味深いのは、督促の連絡が、すでに提出した者を含めた全員に発せられていることである。特定個人にこのようなメールを発すると、発信者と受信者との間で、直接的な叱責の関係が発生するからであろう。この点、誰が提出していて誰が提出していないか明確でない形であれば、「不心得」な者も多数者の中に埋没することができる。

長期的な協力関係を維持し、一人一人の力を合わせて働くことをベストとする日本的な考え方のもとでは、このように、その組織の一員である一人一人に対してきめ細かな配慮が払われている。

4 明確な意思表示の必要：中国人のコミュニケーション

これに対して、中国人の場合には、明確に注意されない限り、自分の行動は正しいと推定する傾向が明らかに認められる。またこうした注意も、納得できる明確な理由を示さない限り、彼らは自分の不都合を認めようとしない。しかし、困ったことに、「場における自己ないしその立場を認識していない」と言っても、元々そのような「場」の意識が弱いのであり、このことは、明確な説得理由にはなりにくい。

〈事例1〉で示したように、中国人の場合、対話者二者間でコミュニケーション（感情交流）を行うのが原則であるのに対して、日本の場合、話者は、「場」における自分の立場を自覚し、自分の発言が伝わり影響を及ぼす人びとの範囲をも感じ取り、これらの人びとに対して不都合にならないように気を遣って話さなければならない。筆者が日本の組織で働き始めて間もなくのころ、このようなコミュニケーションの日本的ルールを明確に意識するようになった時、中国育ちの筆者には、日本の組織（あるいは場）における発言の大変さがしみじみと感じられた。そして日本人同士のコミュニケーションがどうしても当たり障りのない範囲に止まりがちだという現象、また日本人の口数が少ないという現象をこれによって深く理解したと感じている。そして、大勢の日本人が集まる場所では、誰にも不都合にならないように気を付けて話す結果、その最大公約数は「今日は」になってしまうのではないかと考えている。

この点、中国人は日本人と大きく異なる。中国人は自分を特別に扱われたいと気持ちがおさまらない。中国へ調査に赴いたある日本人研究者は、中国機関の担当役人に対して、自分の所属組織の長が発行した「関係者各位」で始まり、「調査上の便宜を図ってほしい」という趣旨の紹介状を手渡した。これは英語でいう To Whom It May Concern に当たる文書で、国際的にしばしば使われる表現である。しかし、この文書を見た中国人の役人は、「関係者各位」を指さして、「何だこれは？」と激怒し、結局彼からはさしたる協力は得られずに終わった。彼らの場合、協力は人格的な接触の中で行われるのであり、非人格的な関係のもとでの協力依頼は想像も及ばないからである。彼らからの協力を得るためには、知人である紹介者から彼を名指した紹介状を示さなければならない。

また親しい中国人同士がどこかで会ったとき、「場所柄もわきまえずに」暖かい熱烈な挨拶を交わす。さもないと、彼らは大いに違和感を感じるし、場合によって、相手が自分に対して冷たいのではないかと不満をもたれ、時には面子をつぶされたと感じられ、憎まれる結果ともなりかねない。中国人は、自分に対して特別に示された熱烈な親愛感でないかぎり、これを親愛感とは受け取らないからである。日本人学生の場合、同じように愛情を持って接すると、学生は「先生が皆を同じように愛してくれ、同じように扱ってくれて嬉しい」と喜んでくれる。しかし中国人の学生は、この場合、先生が仕事に熱心であること（敬業精神）は認めるが、それを学生への愛情とは感じない。彼らにとって愛情とは、特別な者への特別な感情であり、いわゆる「私情」であると考えられているからである。このため中国人の場合、いわゆる「依怙最厚」は当然で、ひいてはそのための特殊の関係作りが行われる。このため、彼らの場合、職場など多数の仲間全員が仕事を中心に関わり合うなかで、互いの好意的感情を育てることはまずない。

5 強い「情」、弱い「場の制約」：中国の文化

〈事例2〉

ある有名大学で博士号を取得し日本の大学で教鞭をとる中国人女性Cさんは、恩師の退官に際して、OBによる謝恩会を企画し、OB全員に謝恩会への参加を求めるEメールを送った。彼女にとって驚きだったのは、あまたいる日本人OBたちからは1通の返事も戻ってはこなかったことである。そこで彼女は、「恩師の定年退職で、先生がもう皆の役に立たなくなったから、誰も返事をくれないのか」と嘆き（そこにはきわめて中国的な発想が表現されていてそれ自体大変興味深い）、ある日本人に相談を持ちかけた。この日本人が言うには、あなたは博士号取得後20年、卒業の順でいえばOBのなかで中くらいの位置にいる。皆、あなたが謝恩会を招集する立場にはないと考えているのでしょう。一番古い先輩たちを何名か発起人にすえ、あなたは、「事務局長」の立場で雑用を処理しなさいと。その結果、この謝恩会は大成功に終わり、日本人のアドバイザーは、大いに感謝された。Cさんの最初にとった行動は、恩師に対する「親情の発露」であった。しかし、中国人Cさんは、謝恩会を取り巻く「場の状況とそこにおける自分の位置」を全く意識してはいなかった。そのためCさんは自分の深い思いだけで行動しようとしたのである。

同様の事例は、中国人の間では格別珍しくはない。ある大学で教鞭を執る中国人Dさんは、日本文化についてかなりの理解をもっていたが、ある時この大学をよくしたいという「熱情」に駆られてか自分の立場を強化したいと考えてか、大学改革のための検討グループを設立しようとした。それは彼の熱意あふれる行為であり、関係者が自発的に集まって問題の検討を行おうという趣旨で、関係する人びとに参加を呼びかけた。しかし、彼は、これらの人びとが所属する部局の長でこの問題に責任を持つ人物をこの会合に招くべきだという提案をあっさり却下してしまった。「彼は忙しい」というのがその理由であった。呼びかけを受けた人びとの多くは、「場」の状況に無頓着な彼の行動にある種の違和感を覚えていたためか、結局この会合には出席するものがおらず、それは自然に消滅してしまった。

6 「情」と「立場」

中国の文化では、二者間の「情」が「立場」よりも重視される。このため、日本人には分かりにくい行動がしばしば見られる。

〈事例3〉

ある大学で教鞭を執る中国人教員のEさんは、同じ中国人教員Fさん、日本人院生のGさんと親しくしていた。ある日Eさんは、Fさんを前にして、学生Gさんにむかって言った。

「Gさん、F先生は博士号を持っているし、論文を指導してもらったら」と。

これはまさにEさんのF先生およびGさんへの好意にもとづく発言にほかならない。F先生を信頼しているE先生は、自分の親しい学生Gさんに、その指導を受けたらどうかと勧めているのである。しかし、GさんはH教授の指導学生であり、F先生とは専門が大きく隔たっていた。

それを聞いた日本人のGさんは困った表情を浮かべ、またF先生も「専門がまるで違うから指導するのは無理でしょうね」ときっぱり断った。

この事例では、F先生と親しいE先生は、中国人どうしの友情から、専門違いにもかかわらずH教授の指導学生を指導するようF先生に躊躇なく頼んでいる。そして中国人の場合、普通親友の面

子を立てるためにこうした依頼を快く了承し、一層互いの友情を深めていく。この事例は、「立場」よりも二者間の感情を重視するコミュニケーションの典型的な事例である。

これに対して、日本的な考えに立つと、GさんはH教授の指導学生であり、H教授からの依頼がない限り、他の教員が勝手にGさんを指導するのは論外であり、立場の無視も甚だしいということになる。専門違いのFさんに指導を頼む筋合もない。受け取りようによっては、それはH教授の指導力に疑念を挟む、非常に失礼な行為ととられかねない。しかしこの例では、個人の「情」が何よりも優先され、「場の状況」すなわち人びとの立場が考慮されていない。こうした中国的「情への執着」は、時に美しい行為を生み出すとともに、日本の社会にあっては時に困った事態を生み出しかねない。

以上の諸事例が示しているように、それぞれの社会における行動の基本的な座標軸が異なると、双方善意であっても、様々な誤解やトラブルが生じやすい。中国人の場合、様々な場面における行動に決定的に影響を及ぼす要因は、「相手に対する深い感情の有無」である。肉親の情が中国人に献身的な行動を呼び起こすことは広く知られている。「家族のためなら24時間でも働く」というしばしば聞かれる中国人の言葉は、こうした「情」の深さを端的に表していると考えられる。さらに血縁関係のない者に対しても、中国人は、相手によって深い感情を抱く。中国では、友人に対する最高の感情は「親情」、つまり、血縁関係で繋がる親族に近い濃厚な感情である。

これに対して、日本人の場合には、すでに指摘したように、行動の影響が及ぶ範囲を強く意識し、その範囲内での自分の位置を認識し、それに基づいて自分の振る舞い方を決めるという傾向が見られる。この範囲は立場や問題によって異なり、時にそれは日本の社会であったり、時には地域の社会であったり、また時には職場であったり、時には会議の場であったりと、意識の向け方によって変動するという構造を持っている。このように日本人の行動を決める原理を「場の意識」と考えると、中国人の行動を決める原理は「情への執着」と呼ぶことができよう。

V 本音を吐露する「情」 vs. 表現を抑制する「場の意識」

〈事例4〉

中国人のIさんとJさんは長年の親友である。二人とも日本の組織で働いていた。二人は時々食事を共にしていたが、ある日、Iさんは、Jさんに向かって、少し怒った口調で言った。「あなた最近あまりしゃべらなくなったわね。職場のことで何か悩んでいるの」と。

「何もないよ」と、Jさんは落ち着いて答えた。

「ウソ。親友の私にも言えないの」と、Iさんは一層不満そうに言い返した。

「本当に何もないんだから」と、Jさんははっきりと否定した。

「分かったよ。もう親友の私も信じられなくなったのね」と、Iさんは言った。

「そんなことは絶対ない」と、Jさんは必死で答えた。

〈事例4〉は次のような中国文化の特徴を示している。すなわち、中国の場合、親友は家族（それも中国的な濃密な家族関係）並みの付き合いをする親しい関係である。互いに心を打ち明けて話し合うのが原則である。個人の一身上の話はもちろんのこと、職場の人間関係や出来事も心おきなく話し合う。

しかし、この事例の場合、Jさんは中国人ではあるが、専門の関係などで日本文化により深く馴染んでいる。このためIさんを親友だと思っても、職場やその周辺の立ち入った話、職場の人びとについての噂・情報を口にしようとする気持ちはなくなっていた。Jさんは日本的に「場における自己の位置」を意識し始めたからである。日本の場合、職場のことは職場の同僚（ウチの人）と話し合うことであって、これ以外の人（ソトの人）に話すことには抵抗がある。日本人は同じ組織に所属しても、課・部以外の人びとに自分の課・部の立ち入った話をしない傾向がある。「身内の恥を外に漏らすな」である。もう一つ、日本人は課・部以外の人と話すときにある心理的な抑制を感じる事が筆者自身の心理体験からもよく分かる。同じ課に所属する「仲間」同士で話し合うことで本当に理解し合い、互いの苦勞を慰め合い、「仲間」という絆を一層深めることができる⁽⁶⁾。

日本人は共通の活動、例えば部活動や仕事などを通して、精神生活を含め多方面にわたって互いに支え合い「仲間」の情を楽しんで生きていると筆者はみている⁽⁷⁾。しかし中国では、職場の出来事、仕事上の悩みや人間関係のトラブルについては家族や親友と語り合い、そこで慰めを求め、問題の解決方法を探るのである。しかし、彼らにとって同僚というのは基本的には利害が衝突する関係者であり、ライバルとして意識されている。このため互いに情報を共有して仕事上協力し合い、精神的に支え合い、ともに仕事を通して人生を充実させようとする日本的な仲間意識は育たないといっている。筆者自身その楽しさを十分に理解しており、宴会の二次会などに誘われないとある寂しさを感じたりするが、職場の構成員が全員参加するような飲み会が中国で見られないのは、こうした意識のあり方の反映である。

このように、日本人の「仲間」意識は、中国人には一般に理解できない。仕事が終わった後の宴会などで、お酒が飲めない人びとまでがこれに参加するのは、一緒にいるのが楽しいという「仲間」の感覚である。日々共に苦樂を分かち合っている「仲間」であるから、仕事上の話は家族にはではなく、「仲間」と語り合う傾向がある。彼らはいつでも喜んで「仲間」を支え、ともに責任を持ち、互いに守り合う気持ちを強く抱いている。家族ではないが、人生を共に楽しくする以心伝心の大切な「友」である。日本人男性がしばしば言うことであるが、「家庭で晩酌を楽しむよりも、職場で気のあった友人たちと飲み、上司の品定めをしたり、上司の悪口（これは気晴らしであって普通上司に対する悪意はないようだ）を言い合うほうがよほど楽しい」らしい。

VI 文化のはざまで起きる混乱

〈事例5〉

中国生まれ中国育ちの筆者は、ある日、日本での大学院時代の指導教官を囲んでゼミ生、ゼミOBの皆さんと久しぶりに会食を楽しんでいた。食事が終わった時、筆者の目の前に伝票が置かれているのに気付いた。自分の立場を考えて一瞬迷ったが、筆者はその伝票を手にとって会計に向かった。そのとき、後ろに指導教官の声が聞こえた。「岩田さん、伝票をください」。私は立ち止まって素直に指導教官に伝票を渡した。たったそれだけのことであるが、子細に見るとそこにはある文化的な差異と混乱が認められるように思われる。そこに表れている問題というのは、「場」というものについての理解と自己の「情」の表現との対立・混乱である。

この〈事例5〉のなかの筆者は、長い間指導教官からいただいたご指導やゼミ生たちのこれまでの支えを考え、自分自身定収を得るようになっていたことから、感謝の気持ちで全員の食事代を払うつ

もりになっていた。このあたりは中国的な「情への執着」とお考えいただきたい。ただし、集団内部でのこうした支え合いの感覚とそれに対する感謝の念はきわめて日本的であり、この点、筆者は日本文化に強く影響されていたと考えられる。中国人の間では、一般にこのような感覚は乏しいからである。中国では、会食は親戚・親友といった親しい人間関係の中で行われる感情交流である。言い換えれば、身内同士（中国語で、「自己人」「一家人」「自家人」）のみでテーブルを囲んで同じ鍋のものを食べる（中国語で「同鍋撈勺」）と考えられている。このような会食観のために、親友同士で食事をするときには、一人で全員の食事代を払うのが普通である。これはまさに「親情」の表現であり、この場合割り勘にすると、他人行儀で水くさい態度ということになり、以後互いに遠慮なく意見を出し合い、助け合うことができなくなる。だから、友達同士の間では交代で招待し合うという風習が成り立っている。

また中国では、それほど親しくない他人に何かをお願いするときに、まずその人を食事に招き、その人が食事の招待を受けいれたら、承諾を得たのと同様のことと考えられている。招待を受けたくないときには、中国人は、「その問題については改めて考えよう」などと体よく受け流す。いわゆるビジネスランチの場合には、初めての訪問者を交えて一緒に食事をするが、そこには、もしチャンスがあれば身内の関係にまで持ってゆきたいという潜在的願望が込められている。それはもし可能ならば「情」の関係を得心したいという願いである。そこに利害関係の意識が働いているとしても、現実的に「親情」を交換できるようになった中国人の間では、利害の意識は消滅し、「親情によって相手を支え、場合によっては相手を頼る」という、「美しい感情」が成立するからである。

これに対して、日本の社会では、営業上の接待も盛んに行われており、この点で中国に近い状況も見られないわけではないが、同じ活動をしている親しい人びと、例えば、部活動の仲間、職場の同僚などがともに食事するときは全員割り勘にすることが多い。ある日本人学生は、一緒に食事した中国人の留学生が、皆の食事代を一人で支払ったことに驚きを隠せなかった。決して豊かでないこの留学生の行動は日本人学生には不思議でしかたがなかったのである。

この事例のなかの中国人すなわち筆者は、日本での暮らしが長く、ゼミの慣習も分かっていたので、日本的なやり方が一瞬脳裏に浮かんだ。しかし、結局中国の文化に押された形でこうした行動をとることとなった。それはある種の「情への執着」であった。

しかし、日本文化の側から、この事例をみると、そこには奇妙な点がいくつか見られる。すなわち、指導教官を中心に開かれたゼミ生の食事会では、指導教官がこの会食の主催者である。この場合、指導教官の地位や立場などに配慮するならば（つまり「場における自己」を意識するならば）、先ず、指導教官の立場・気持ちを尊重することが何よりも大事であると考えられる。日本的な考えで厳しく言うと、指導教官の立場を考えず、「場」における自分の立場をきちんと踏まえることなくしゃしゃり出ることは、行き過ぎた自己主張・自己顕示としか映らない。

つまり、日本の場合には、しばしば指摘しているように、「場」の状況とそこにおける自己の立場を認識し、こうした自己の立場からの視点によってその振る舞い方を決めようとする。この事例は、二つの文化に挟まれた筆者自身の混乱ぶりを示している。

「場」における全体状況と「場」における自己の位置を認識（これが特に重要なのだが）し、それによって自己の振る舞い方を決定すべしとする日本文化の要請と自らの「情」にしたがって率直に行動することを求める中国文化とのこうしたずれ違いは、至る所に見られる。

Ⅶ 日中両文化の板挟み：文化的適応の難しさ

二つの文化における行動の基本的「座標軸」の違いは、興味深い形で、日本に住む中国人個人の間でも発生する。

〈事例6〉

長年日本で教鞭を執る筆者の友人Kさんの話である。Kさんは仲のいい中国人の「友人」Lさんに、「一人暮らしで寂しいだろうから、金曜の夜私の家に来て一緒に食事しましょう」と親切なお誘いを受けた。しかし、Kさんはその好意に深く感謝しながら次のように断った。「金曜の夜はご家族が自宅でくつろぐ時間で、私がお邪魔するのは悪い」と。しかし、Lさんは、さらに続けて熱心にKさんを説得しようとした。「家では私が喜ぶと、家族は皆喜ぶから大丈夫」と。中国生まれのKさんは、こうした考え方は十分に理解できたが、日本的な感覚を身に付けていたKさんには、日本人であるLさんのご家族が、中国人と同じ感覚を持っているとは考えにくく、Lさんのご厚意を固辞せざるを得なかったと言う。このように、中国人の間の関係では、日本の文化をある程度理解することは、同時に中国文化との板挟みになることを意味する。

この事例は、中国人が親しい友人とは家族並みの付き合いをするのが普通であることを示している。このため、LさんはKさんを妹のように見なし、いつでも自分の家に暖かく招待しようと考えていた。これ以上ないほどの「親情」に対して、中国育ちのKさんは、Lさんに対しては当然感謝の気持ちで一杯である。しかし、日本人家族の日本風の考え方に配慮するならば、こうした厚意は固辞せざるを得ない。しかし、Lさんの好意を固辞するKさんの態度は、Lさんからは好意のない冷やかな態度と受け止められかねない。

この事例を、日本側から眺めると次のようになろう。日本の場合、同じ活動を行う「仲間」はその活動を繋がりとしてコミュニケーションを行い、人間関係を楽しむというのが普通である。すなわち、日本人は、職場の同僚同士の付き合いを基本的にその職場の当事者に限定する。互いに気が合う場合には、たまには互いの配偶者の了解を得て家族で食事をしたりするケースもあるが、このようなケースは非常に希である。家族まで巻き込んだ付き合いは、当事者だけの一存では決められないのが普通である⁽⁸⁾。日本人の付き合い方では、同じ活動にかかわる者同士と一緒に付き合うことが基本であり、家族であってもその活動にかかわっていなければ、その付き合いに加わる場合非常に神経を使い、互いに窮屈に感じることが多い。日本の社会におけるコミュニケーションは、人・事を含めた全体の状況を的確に把握していなければ、話題に事欠いたり、トンチンカンな発言をしたり、不用意に相手を傷つけたりすることになりかねないからである。日本人同士のコミュニケーションの原則は、その話の腰を折らないように、話がますます盛り上がるようにすることである。だから聞き手も全体の状況が分からないと、このような役割を果たすことができなくて、座が白けることになる。話し手も全体の状況が分からない人がいると、話題に苦勞することになる。

このような事情があるために、ごく少数のケースを除いて、日本では夫と妻の友達は別々に付き合うことが多い。日本では、家族であっても、その中の誰かの一方的な気持ちでは物事を決められない。家族の気持ちを確認したり、了承を得たりすることは常識である。そうでないと、招待された相手も気詰まりで楽しく付き合えないからである。

しかし、中国人の場合には、友達の友達は友達であり、自分の親友は家族の親友である。親友同士は家族並みの付き合いであるとはいつても、多少の遠慮が必要であるが、本当に気楽に話し合えるの

で、それほど苦しく感じることもない。

この事例もまた、「場」における自己の位置を認識したうえで行動する日本的な行動原理と自己の思いを中心に行動する中国的な行動原理の衝突を示しているように思われる。

このようにこの二つの社会の行動原理が異なっているために、日本という異文化の社会に住む中国人同士の間にも、両文化に対する感覚や理解の程度の違いによって、扱いにくい問題が発生しがちである。先の事例では、Lさんの家族はLさん以外皆日本人である。そして日本人家族は中国的な人間関係には馴染みが薄く、中国的な付き合い方には困惑する可能性が大きい。

事例のような単純な状況ではなく、異文化を背負って日本の組織の中で働く中国人にとって、問題はあっという間に複雑となる。組織や組織の中の日本人には、相互に中国とは異なる期待がある。日本の組織には、集団内部の「公」(publicの概念とは異なる)の基準を曲がりなりにも満たそうとする強い期待がある。また役割の分担に関しても、「公」の必要を優先しようとする。これも、再々論じているように、「場における自己の立場の認知に基づく行動」である。しかし、個人間の「情」を優先する中国の文化にあっては、「公」よりも二者間の「情(=私情)」が優先される。こうして日本の組織の正しい期待を誠実に満たそうと努めることは、中国側の視点からは、何らかの個人的利得を得るために行っている「ごますり」と受け取られかねない。そこには、二つの異なる座標軸、すなわち「場の期待を満たそうとする自発的な行為」と「幅広い意味での利害を意識した二者間のゴマすり」といった、大きな解釈上のズレが生ずる可能性が少なくない。「場の意識」をふまえた日本人の行動原理と二者間の感情交流に基づく好意の重視という中国的な行動原理の違いは、相互の間に誤解を発生させる危険が極めて高い。

最近、学部生として来日しかなり日本文化を肌で感じている中国人学生や、来日して間がないのに日本文化が少しわかりかけている中国人学生と話し合う機会があり、彼らから大変興味深い指摘を得た。彼らも日本の文化と中国の文化との板挟みになっているという指摘である。前者は、長年日本にいながら日本文化にほとんど無感覚な中国人たちに強い違和感を抱いていたし、後者は、いつの間にか中国人留学生と距離ができてしまって、仲間に入れなくなってしまっているというのである。

筆者は、日本人社会に自らの意志で入り込んできた中国人の側に、適応のより大きな責任があると考えている。しかし、それは以上見てきたような行動原理の違いを背景に持つ至難の業である。日本の側(少なくともその知的な部分)に対しては、それぞれの社会の行動原理の違いを考えて、感情的反発でなく知的理解(文化相対主義的な理解)を期待したい。これこそ筆者が本稿の執筆に思いいたった重要な動機の一つである。

終わりに：行動原理の違いと相互理解の必要

以上検討してきた様々の事例からわかるように、「場の全体状況とそこにおける自己の位置の認知」と「限られた親しい関係における情の重視および場の意識の弱さ」とは、日本文化と中国文化とを理解する上での「基軸的な座標軸」(ないしはその重要な一つ)と考えられるのではないかということである。このような文化的差異は、双方全くの善意でありながら、しばしば不幸な摩擦を生み出す。こうして、組織の中では、採用された中国人に対する「また中国人か」という日本側の不満のつぶやきや「日本人は中国人に冷たい」という中国側の不満が累積してゆくことになる。日中関係の緊密化と相互の良好な関係へのますます高まる要求の中で、両文化への理解を高めることは、今日喫緊

の課題であると考えられる。本稿のテーマは、こうした誤解の源を解き明かしたいというところにある。

以上日本人と中国人の行動様式の特徴を「場における自己の認知」と「二者間の情への執着」を基本軸として解明してきた。常に全体状況の中の一部である自分とその立場（位置づけ）を認識して行動する日本人の振る舞い方と、人・事に対する自我の思いをストレートにぶつける中国人の行動とは対照的でさえある。「人前もはばかりことなく、自分の情をあらわすために親友と抱き合う」中国人の行動を、多くの日本人は、ある種の違和感を持って眺める。しかし、このように行動しない友人に対しては、中国人は冷たいと感じる。

日本人の「場を意識した」当たり障りのない挨拶を中国人は気持ちのこもっていない言葉として受け取る。気持ちを込めていない言葉は本音ではないと解釈するので、彼らは人をいい加減に扱っていると感じてしまう。それは彼らにとってあまりいい気持ちのものではない。中国人の人間関係の親しさを計る重要な尺度は、その付き合いにおいて、「私」に関する真実の情報・思いを相手に伝える量と深さである。このため、自分の事を控えめに話すことを美德とする日本人は、いつも人を遠ざけていて、本心が見えない人びとと感じられる。中国人にとって、日本の職場や友達関係だけではなく、家族関係も中国に比べると、かなりの温度差がある。そのことが理由で、日本人との結婚をあきらめた中国大陸および台湾の友人を筆者は何人か知っている。中国人にとっては深い感情の交流こそが重要であるからである。

また「場」をわきまえて行動する日本人が、同じ相手に示す態度や言葉の相違いに、中国人は強い違和感を持つ。「場」を意識することの少ない中国人、自分のストレートな思いを重視する中国人には、状況相対的な自己表示は、理解が困難であるからである。

反面、全体状況をふまえず、自分の立場をわきまえずに、自分の思いだけで行動しようとする中国人の振る舞いに、多くの日本人はとまどいを感じている。彼らには中国人がいかにも自己主張・自己顕示が強いように見えるからである。たとえば講演の司会者が、会場を盛り上げようと、あるいは聴講者の理解を深めようと、全くの善意から、講演者の話を中断し、長々と自分の意見や解説を入れるといった行為は、日本人の間では立場をわきまえない不躰な行為と映る。しかし、これは中国人が「場」と立場を意識することが少なく、自分の想いをストレートにぶつけようとする傾向のひとつの現れである。

また、中国人が親しい友人との間で示す強い「情」に結ばれた暖かさとそれ故に無視してしまう「公的な」関係に、日本人は違和感をもつように思われる。中国社会の人間関係にあっては、「情」の関係が何よりも優先され、これが人びとの社会生活の基本的原理をなしているのに対して、日本の社会では職場の公的ルール（日本的な「公」）が、情で結ばれた私的関係より優先されている。

こうした行動原理の違いから、日本在住の中国人が日本文化の期待に応えようとするれば、当然に中国人同士の間関係の維持にはある種の障害がもたらされることはすでに指摘した。

もちろん、日本人の中にも、中国人の人間関係と相性がいいと感じる日本人もいるし、逆に日本の文化に馴染みやすい中国人がいることも事実である。筆者自身、ごく少数ではあるが、こうした傾向を持つ人びとと接した経験がある。しかし、母国の文化をすでに身につけている人びとにとって、もう一つの文化に対して、知的・概念的レベルを超えて、心理的レベルでも共感すること（異文化を肌で感じ肌で理解すること）へのハードルは非常に高い。人びとは普通社会化の過程で形成された基軸

的な価値観に導かれた心理的な衝迫によって動かされているからである。しかし、その文化をその中で育った人びとと同じように感じ取り、行動できることこそ、異文化理解の理想であり、これこそ真の文化的適応であるということができよう。

真の国際理解と国際友好を推し進める上では、双方が相手の文化を知的レベルにおいてのみでなく、実感のレベルで理解し、性急な価値判断を避け、相手の立場に身を置いてその行動の意味を理解する努力が必要であると考えられる。

本稿において、筆者が通常のオーソドックスな学術的方法を避け、実感に訴える事例の分析に大きく頼るというややヘテロドックスな方法に訴えたのは、こうした実感レベルでの文化理解の重要性を強く意識したからにはほかならない。文化の比較分析においては、こうした方法は、許容されるべきものというよりは、一つの有効な方法であるとさえ、今筆者は考えている。本稿に続くいくつかの稿によって、筆者は日本の文化と中国の文化との比較分析をさらに深く掘り下げてみたいと考えている。本稿は、そのための分析枠組みの提示であるとお考えいただきたい。それぞれ異なる文化で育った読者諸賢からの叱正を得て、筆者の日中比較文化論により磨きをかけたいと願っている。

注

- 1 出色の中国人論としては、幅広い読者を対象としたものではあるが、園田茂人『中国人の心理と行動』（日本放送出版協会、2001）がある。
- 2 ここで、問題の分析者である筆者自身について、簡単に説明しておく必要を感じている。筆者は、中国で生まれ、24歳まで中国で育ったが、以後20年にわたって日本の社会に住み着いている。日本の社会における育児の過程、なかでも保育園児の母親たちとの頻繁な接触や、日本文化を吸収して育った家族との生活、大学院博士課程（名古屋大学）における優れた人びととの実り多い交流などを通じて、日本の社会・文化に馴染んできた。なかでも日本の文化を理解するうえで重要な契機となったのは、日本の大学組織（つまり熊本大学）に正規のメンバーとして受け入れられて以後の、明確に責任を持つ形での組織活動のなかで、これまでは主として概念的知識として受け入れてきた日本の文化を、自分でも衝撃的であったのだが、いわば「肌で」感じるようになり、自分が、日中文化の比較分析を行う上である意味きわめて有利な位置に立っていることを自覚し始めたことにある。つまり、初年度一年間の経験は、それまでの20年にわたる体験観察を一気に集約するのに役立った。筆者にこのような貴重な機会を与えてくださった熊本大学の同僚諸氏（教職員の皆さん）に深く感謝し、本稿を同僚諸氏に捧げたいと心から感じている。
- 3 「親情」という表現は日本語にはみられないようであるが、中国では、肉親やこれになぞらえるほどに親しいとの間の濃密な感情を表す言葉としてきわめて重要な意味を担っている。
- 4 ここで注意してほしいことは、中国人のなかにも日本人に近い感覚の人がいるかも知れないし、また日本の文化から影響を受けた人もいるので、ごく僅かな中国人は日本人と同じ感覚で受け止めるケースがあるかもしれないことである。筆者もこのことを忘れていたわけではない。
- 5 濱口忠俊『日本らしさの再発見』「V日本らしさとは何か—アウトサイト・インの原理—」（243-262頁）参照、日本経済新聞社、1977。
- 6 この傾向は、長期の安定した雇用や年功的な賃金体系が大きく関わっている。日本の組織がこうしたシステムを徹底的に壊したとき、こうした日本人の行動がどのように変化するか、組織の活力がどのように変化するかは、大変興味深い問題であると筆者は考えている。
- 7 学校の「部活動」の人間関係はその典型である。中国の学校では「部活動」がない。筆者の息子が小

学校4年生の時、留学のために一年間中国の親戚に預けた。中国の学校は部活動がないと聞いた彼は「つまらないの」と悲しそうに言った。息子の反応は私に衝撃的であった。日本に戻った後、私立中学校の受験のために6年生から塾に通い始めた後も彼は部活動を続けていて、塾の時間に間に合わせるために、いつも親が車で子供を小学校から塾に送る日々であった。

- 8 これは、最近の日本の状況といえるかもしれない。かつての日本では、企業で働く夫が、夜予告もなく突然部下たちを連れて帰宅し、妻にその接待を求めることが皆無ではなかった。しかし、これは業務の延長と見なされており、親友とのつきあいに関わる先の事例とはややその趣を異にすると考えるべきであろう。

日・中社会の行動原理と行動様式:比較分析(1)
—「場における自己の認知」VS.「二者間の情への執着」—
岩田 奇志

A Comparative Analysis of Japanese Culture and Chinese Culture
—Keen Senses to Surrounding Situations vs. Earnest Emotional Attachments —

The Japanese are, on the whole, keen to situations, or rather the position of themselves in surrounding situations, to be exact. They usually think over their own positions in a certain situation and decide their actions accordingly. The author considers this type of actions higher self-direction rather than controlled actions by others.

On the other hand, the Chinese are keen to their own thoughts and sentiments. They are, on the whole, carefree about their own positions in surrounding situations.

This analytical framework, I believe, provides a penetrating views of basic behavioral principles and behavior patterns in both society, for instance, Japanese considerate and reserved manners and Chinese frank and self asserting expressions. This Cultural differences are apt to cause deep misunderstandings between the Japanese and the Chinese.

In this paper, the author also analyzes confusions, that is, possible psychological confusions in persons who started understanding the other culture, and also awkward disparities between those who started realizing the meaning of the other culture and those who do not. The author firmly believes that deeper understandings of the other culture respectively, are indispensable for keeping friendly and harmonious relations between both people, that is, the Japanese and the Chinese.